



ハブの港

川崎ゆきお

メイン通りだが、その端は少し淋しい。だがまだ店屋は並んでいる。もう少し行くと、大きな交差点があり、そこで、このメイン通りは終わる。そのメイン通りで一番賑やかなのは駅前だ。そこから離れるに従い、地価も安くなり、賃料もほどほどになる。そのため、ぎりぎり離れた場所に人気が集まるのだが、駅から徒歩で結構歩かないといけないので、人通りも寂しくなる。

歩いてまで、そんな端っこまで行く気が起こらないのだが、馴染みの店や、特徴のある店なら、歩けない距離ではないので、通う人もいる。立花は駅からの距離とは関係しない。家から駅へ出るとき、そのメイン通りが通り道となるため、その端っこの店の前をよく通る。ある夜、そこにある中華屋へ遅い夕食を食べに入った。目的がそれなので、駅前まで出る必要はない。かなり手前で用が済む。そういう客もいるので、端っこの店舗でも結構流行っているのだ。ただ、地元の人に限られるが。餃子が有名な店だが、不思議と餃子定食がない。このでの餃子の食べ方は、ご飯ではなく酒なのだ。立花は、餃子を三人前注文した。ご飯はないが、これで満腹になるはずだ。出てきた餃子を食べていると、横の親父が声をかけてきた。「行ってみないかい」最初、中年男だと思っていたのだが、違っていた。服装が若いためだ。かなり年を取っている。「はあ」と立花は聞き返した。省略しすぎなのだ。「勝手口が裏にあるタイプじゃないと無理だがね」派手な服装の老人は、結構酔っているようだ。「行きたいのなら教えてやるよ」「何処へですか」「ああ、それなんだが。それはよく分からない」「分からない場所へ、どうして行くのですか」「面白いからだ」立花は酔っ払いに絡まれたようなものだ。「この中華屋は、勝手口は厨房にある。だから、駄目だ。しかし、隣の居酒屋は客席から勝手口へ行ける。トイレの横のドアがそうだ。その居酒屋は蘇州風なところへ出られる」「そしゅう」「シナの蘇州だ。蘇州夜曲で有名だ。桃源郷だよ。洋食屋があるだろう。その二つ向こうに」「洋食屋?」「英語で書かれておるから読めん」「ああ、レストランですね。あそこも居酒屋レベルですよ、飯屋に近いです。カレーが安い。でもカレーだけ注文する客はいません」立花はうっかり、話に乗ってしまった。「そのカレー屋の勝手口はね」「カレー屋じゃないですよ。一応飲み屋風レストランです」「何でもいい、そのカレー屋の勝手口はベルサイユに繋がっておる」「はいはい」「この通りに並ぶ店屋は、いろいろなところに繋がっているんだ。ハブ空港だよ。ここは」「行って見たのですか」「ああ、居酒屋発の蘇州は、週に二回は行ってる。カレー屋のベルサイユは一度きりだ。性に合わん」「そうなんですか」立花はあっという間に二人前を平らげた。さすがに三人前にかかる箸が重くなる。「つつい行ってしまおうんでね。だから、今夜はこの餃子屋に来た。ここなら厨房側にしか勝手口はないからね。だから、勝手に入れない。まあ、勝手口は外からは勝手だが、内からは勝手じゃない。もうひとつ、たこ焼き屋があるだろう。あの狭い店だ。あそこから近江へ出られる」「おうみ」「琵琶湖畔だ。安土城に登れるぞ」立花はもう聞いていない。スマートフォンで、ツイッターのチェックをしている。「親父」「はい旦那」「この方をそこの厨房へ入れてあげな」「厨房ですかい。旦那」「ああ、それで、勝手口から帰ってもらえ」「そんな面倒な」老人は店の親父と話し出したので、立花はやっと開放された。そして、ツイッターをまさぐっている間に、老人は帰ったようだ。立花もやっと三人前の餃子を平らげた。胸焼けがするので、お冷やをお代わりし、がぶ飲みした。そして、レジで勘定を払ったあと、親父が、カウンターの台を上げた。「出ますか、勝手口から」「ああ、

「そうだな」立花は、洒落た親父だと思った。そして、その乗りに付き合うべきだと思い、厨房へ入った。非常に狭い。そして、その端にあるドアへ向かった。横向きにならないと通れないほど狭い。そして、ドアを開けた。了